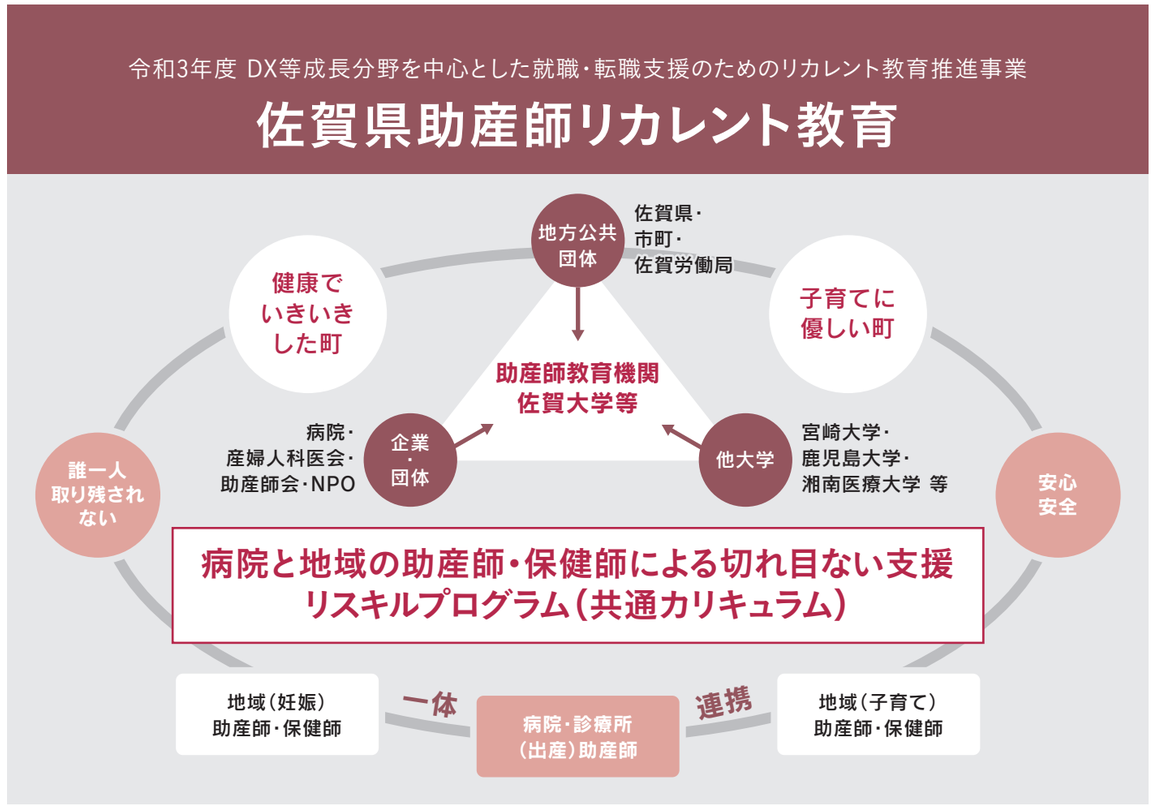

左より 医学部看護学科事務室の原口美保子さん、佐藤珠美教授、榊原愛助教、ダン尚美さん。

助産師・保健師リスキルプログラム

少子化や助産師不足だと言われる中で取り組まれた、佐賀大学の佐賀県助産師リスキルプログラム。その中心となって取り組んでいるのが、医学部看護学科の佐藤珠美先生です。なぜ助産師を取り巻く状況が厳しいのか、なぜ助産師のリスキルが大切なのか、そして今回のプログラムの特徴はなにか。助産師とその教育の現場を見続けてきた佐藤先生に、2年間の取り組みを聞いてきました。

助産師教育の危機感がプログラムのきっかけ

助産師が活躍する分野では、【助産師をはじめとする人材不足】【職場で必要とされるスキルの大幅な変化】【困難な再就職】などが妨げとなり、助産師が働き続けにくい状況があります。さらに、「就職したとしても、お産の数が少なくて助産師としての実践を積めない」といった問題も抱えています。

そこで解決のカギとなるのが、助産師のリスキル教育です。人材一人ひとりの専門知識やスキルを向上させることで、助産師や保健師が少ない地域においても母子保健の質を確保するためのプログラムを作成しました。

助産師の厳しい状況は教育現場にも影響として表われ、助産師希望学生の実習を受け入れてくれる施設も数少なくなってきています。

「実習先の不足で、助産師教育を継続していくことに危機感を覚えました。この状況が、リスキル教育に取り組む大きなきっかけにもなりました」

今回のプログラムでは、佐賀県内の産科のある5病院の助産師、市町の助産師と保健師を対象に、妊娠期から子育て期までを通して切れ目ない支援を実現するためにリスキリングを行っています。

学びたい意欲が一歩踏み出す原動力に

本プログラムでは、施設や地域を超えて、助産師や保健師に求められている新たな能力を身につける場や機会を提供しています。コロナの第7波、第8波の影響を受けて教育期間が3か月から4か月になる等、不測の事態も起きましたが、「新しい知識を学びたい」「知識・技術が足りないので身につけたい」「ブランクがあるから再就職が不安」「病院助産師では産前産後ケアの経験が少ない」「育児休暇明けで復職したい」など、勉強への意欲や仕事への意識が高い人が積極的に参加しました。

また、もう一つの特徴は、母子保健に関わる人ならだれでも受講できる〈部分受講制度〉を設けたことです。現地での対面授業以外は、自分が必要な授業を1科目から無制限に選ぶことができ、自分のペースに合わせて受講できるようになっています。仕事に追われている中で能力・スキルの向上を図ることは大変難しいことですが、ウェブ受講が中心だったこともあり、助産師59名、保健師21名をはじめとする116名が、北海道から沖縄までの24の地域から参加しました。

働きながら学ぶのは大変。だから、応援したい。

プログラムの立ち上げ・運営には、予算、講師依頼、講義日程の設定、動画編集と配信など、非常に忙しい状況がありましたが、佐藤先生がスタッフと力を合わせ、働きながら学ぶ助産師・保健師に寄り添った対応を続けました。

「本学にも、助産師になりたいという学生はたくさんいるんですよ。少子化も進み、産科は厳しい状況にありますが、それをいい方向に転換するには今が最後のチャンスかもしれません」と佐藤先生。

今回のプログラムは本学だけにとどまらず、思いを同じくする宮崎大学や鹿児島大学とも連携を取りながら進められました。この動きが、助産師不足の解消や産前産後ケアの充実につながるよう期待されています。

詳しくは、「佐賀県助産師リカレント教育プログラム」のホームページへ